

休場明けのベテランと新しい力の台頭
～大相撲秋場所観戦雑記～

休場だらけで迫力がなくなった横綱陣、いつになっても安定感が見られない大関陣に業を煮やした一部の相撲ファンは、次の世代の活躍に目を向け始めてしまった。

そして、新聞・雑誌・テレビ・ラジオ等が騒ぐ今場所の見所は、の二点に絞られ、芸能ニュースなみの騒ぎになった。

「稀勢の里は本当に復活できるのだろうか？」と「御嶽海は大関の座を手に入れるのだろうか？」
その結果は・・・

稀勢の里の 15 日間は、お世辞にも「復活」とは言いがたい状況だった。序盤を 5 連勝で抜けて、「波に乗れた」と報じるマスコミもあったが、私の目には「薄氷を踏む毎日」としか見えなかった。

左差し手に拘り、腰高のままでは相手の差し手を抱え込む、大関時代に欠点として指摘され続けた型が毎日続いた。まれに右で上手が取れば、力任せに相手を動かす相撲で「強そうな相撲」を見せたがこれは単に運が良かっただけとしか思えない。腰高・半身は守りの姿勢で、攻めの相撲にはなり得ない。あと「一尺でも二尺でも腰を低く」して、「立ち合いの踏み込み」を大きくして、「右で浅い位置の上手を取る」という動作が加われば左の差し手が生きてくる。これが出来ない「肉体的な事情」があるのか否かはわからない。

もともと、見方によっては「こんな相撲でも相手の攻めを凌いでも 10 勝上げることができた」ということは、「守りの力は回復した」と読むこともできる。

色々な意味で、来場所どうなるかが「本当の見所」かもしれない。

御嶽海は、序盤 5 連勝したが内容的には攻めが感じられない、受け身の相撲が目立った。中日に勢に敗れたあたりから歯車が逆回転し始めた。中日を 6 勝 2 敗で折返しはしたが、その後 5 連敗してしまい、終盤にようやく御嶽海らしい相撲を見せはしたものの既に時遅し、9 勝 6 敗に終わった。

どこかを痛めていたのか、「大関・大関」と騒ぎ立てられて不安定な精神状態になっていたのか、真相はわからないが・・・。

私の心配と予想のとおり、「強豪不在の場所で優勝したぐらいで、ちょっと騒ぎすぎじゃないの？」

は当たっていた。(下表参照：御嶽海の 6 場所の成績 赤字=優勝)

それでも立て直して 9 勝 6 敗でまとめられるのは関脇としての実力が備わっているからで、これはこれで喜ぶべきことなのかもしれない。いずれにせよ、これから上を目指していける力士であることには変わりはない。

場所	H29-11 月	H30-1 月	H30-3 月	H30-5 月	H30-7 月	H30-9 月
地 位	東関脇	東関脇	東関脇	東小結	西関脇	東関脇
成 績	9 勝 6 敗	8 勝 7 敗	7 勝 8 敗	9 勝 6 敗	13 勝 2 敗	9 勝 6 敗

白鵬は、この場所で達成できるかもしれない「幕内 1,000 勝」の記録を強く意識していたに違いない。序盤は自分の相撲を確かめるかのような慎重な相撲が目立ったが、中日を過ぎる頃から目の色が変わり、巧さと早さで攻撃力のある相撲になってきた。

毎場所新しい力の台頭が著しい昨今、牙城を揺るがす可能性のある力士が増えつつあることを体で感じてきていただろう。それだけに、対戦する可能性のある力士達についての研究は怠らないようだ。

怪我により休場を余儀なくされることが多くなってきており、体の調子はもう下り坂に入っているのか

もしれないが、三つの基本動作と言われている「四股・鉄砲・すり足」をきちんと重ねていることが注目に値する。

見事に全勝優勝で締めくくり、優勝回数 41 回もさることながら、幕内通算 1,001 勝 180 敗 109 休の実績は相撲史上に残る見事なものである。(下表：白鵬の 6 場所の成績 赤字＝優勝)

場 所	H29-11 月	H30-1 月	H30-3 月	H30-5 月	H30-7 月	H30-9 月
成 績	14 勝 1 敗	2 勝 3 敗 10 休	全 休	11 勝 4 敗	3 勝 1 敗 11 休	15 勝 0 敗

今場所目に止まった力士を挙げてみると・・・

魁聖(西前頭筆頭)は、難しい地位で千秋楽に辛うじて勝ち越したような終わり方になってしまったが、勝った相撲の中を見ると、光るものが沢山あった。脇を締めて浅くまわしを取ることや、腰を割って攻めていくことなどを身に付けたようで、巨体を利しただけではない「相撲の技術」を学んでいることがよくわかる取り組みが目立った。

妙義龍(東前頭 5 枚目)は、低い腰の構えと前さばきの良さ、早い攻めと応変の身のこなしが復活してきた。星数の上では 8 勝 7 敗とあまり目立たない存在だったが、相撲内容には「これぞ妙義龍の相撲」と言えるものが散見し、来場所が楽しみにになってきた。

北勝富士(東前頭 9 枚目)は 7 日目まで黒星なしで「北勝富士らしい相撲」が大きく光っていた。ことによると平成 29 年九州場所のように優勝戦線に加わるのでは・・・と思った人もいたようだが、中日から 3 連敗してしまい勝ち越しは 11 日目までお預けになった。下から押し上げるような突き・押し・押っつけは迫力があり、来場所は横綱・大関を脅かす存在になるかもしれない。

錦木(西前頭 12 枚目)の相撲は、これまで「ネチネチと頑張る」守りの相撲だったが、今場所は立ち合いの踏み込みや早い攻めが見られた。もしこれが本物だとしたら、先々上位に通用するようになるかもしれない。本物かどうか、来場所確認したい存在になってきた。

竜電(東前頭 13 枚目)の相撲は地味で目立たないが、基本を押さえたきれいな相撲が特徴。高田川親方(元関脇安芸乃島)の弟子だけに、190cm の体躯ながら膝を折って腰を低くして前傾で攻めるスタイルが身につけている感じがする。場所を重ねるたびに少しずつ早さや巧さが加わってきているのがよくわかる。前半戦は技能賞をあげても良いような相撲内容で、9 日目に勝ち越し 8 勝 1 敗だったが、その後相撲が乱れてしまい 10 勝 5 敗となった。幕内定着の力を備えてきたことを感じさせる場所だった。

貴ノ岩(西前頭 13 枚目)は、かの事件の影響で休場があり十両まで落ちてのキャンバック。相撲内容からみると、休場前の状態にほぼ戻ったという感じがする。低さ・早さ・厳しさがある相撲で、来場所は元のポジションである幕内上位での活躍を期待できそうである。

嘉風(西前頭 15 枚目)は先場所 2 勝 13 敗という屈辱的な成績に終わり、幕尻近くまで落ちてしまった。初日から嘉風らしい相撲が光り、中日を 6 勝 2 敗で通過。ことによると優勝争いにも加わるかもしれないと浮かれたファンもいたようだが、中盤で一時失速したせいで 11 勝 4 敗に終わった。

今場所は上位陣が比較的安定していたので、優勝戦線を混乱させるような殊勲の星をあげる力士は出現しなかった。殊勲賞・技能賞・敢闘賞に該当する力士がいなかったということで、珍しい「三賞なし」の千秋楽になった。過去を振り返って見ると、三賞の内どれかに該当する力士がいなかったことは何度もあるが、三賞すべて該当者がいないということはなかった。

確かに今場所は殊勲賞に該当する力士はいなかったし、技能冴え渡る相撲を 15 日間取った力士もいなかったが、前項で述べたように、敢闘賞に値しそうな力士はいたと思うが・・・。

怪我により十両に下がった安美錦、幕下の豊ノ島、三段目の宇良の奮闘・復活ぶりも今場所の注目点だった。安美錦は西十両筆頭で 7 勝 8 敗、来場所は少し番付が幕内から遠ざかることになりそうな状況。一方豊ノ島は、西幕下筆頭で 6 勝 1 敗の好成績を上げて待望の十両への復帰が確実にされた。

宇良は東三段目 91 枚目、幕内からは遙か彼方になるような地位まで陥落してしまったが、6 勝 1 敗の

成績で復活への道を歩き始めている。

来場所、そしてその次の場所・・・怪我と戦い、地位と戦い、そして自分とも戦い、復活を期する力士達のこととも忘れるわけにはいかない。

以上